

年より DUP に対して積極的に保存療法を行って来たが、今回その長期成績を検討してみた。

対象：過去13年間に経験した DUP 54例（手術18、保存36）の内、保存的治療された後1年以上外来で経過観察されかつ胃液検査された20例を検討対象とした。平均観察期間40、1カ月（最長103カ月）。穿孔前の潰瘍歴無しを急性例、有りを慢性例とした。

成績：急性例9例、慢性例11例で比較検討すると MAO 17.3：24.3 mEq/h、潰瘍再発3/9：5/11と両者間に有意差はなかったが、H2 ブロッカー離脱出来た症例は8/9：3/11、H2 ブロッカー離脱後再発率50%：88%と両者間に有意差を認めた。

以上の成績より保存的治療された DUP の外来診療の指針を示したい。

7) 総胆管結石症に対する開腹下経胆嚢管的切石術について

齊藤 英樹・片柳 憲雄
山本 睦生・桑山 哲治
藍沢 修・丸田 有吉（新潟市民病院外科）

総胆管結石症手術において総胆管切石後、Tチューブ造設がルーチンに行われてきた。しかし、Tチューブ除去後の胆汁性腹膜炎などの重篤な合併症が認められ、QOLや医療コストの面からも問題点が指摘されている。当科では結石数が数個以下で、高度の胆管拡張や乳頭部狭窄を合併していない症例に対して、開腹下で経胆嚢管的に結石を摘出し、Tチューブを留置しない手術を28例に行った。その際、胆嚢管から肝側胆管内に胆道鏡を挿入する方法を工夫し、肝側胆管に結石遺残のないことを確認している。本法は合併症が少なく、Tチューブ留置例と比べて明らかに入院期間が短縮した（ $p < 0.05$ ）。そこで本法の有用性について報告する。

8) 膵体尾部欠損症の2例の検討

山崎 哲・岡村 直孝
齊藤 義之・草間 昭夫
若桑 隆二・広田 雅行（長岡赤十字病院）
田島 健三・和田 寛治（外科）

膵体尾部欠損症は、これまで本邦では約90例しか報告されていない稀な疾患である。我々は過去5年間に2例の症例を経験したので報告する。1例目は50才の男性で、胆石症を契機にCTで膵体尾部欠損症を指摘された。ERCPでは主膵管は滑らかに途絶しており副膵管及び副乳頭は認められなかった。開腹手術により本症である

ことを確認した。2例目は61才男性で、糖尿病を指摘されており、早期食道癌の周術期にCT等の検査で膵体尾部欠損症を疑われ、術中確診できた。いずれも体尾部に脂肪置換の形跡は認められず先天性欠損の可能性が高いと考えられた。本邦では、食道癌との合併は最初の報告例である。

9) 膵管と交通を認め、下血を来した脾動脈瘤の1手術例

河内 保之・榊原 清
阿部 僚一・松原 要一（県立吉田病院外科）
塚田 一博（新潟大学第一外科）

症例は57才の男性。1994年10月腹痛で来院。CTで膵体部に3cm大の腫瘤を認めた。1996年6月心窩部痛、下血で入院。上部消化管、大腸内視鏡で出血点はなく、CTで膵体部腫瘤は4cm大に増大していた。血管造影では腫瘤に一致して脾動脈瘤が存在した。8月5日2回目の下血。脾動脈の塞栓を試みたが動脈瘤が脾動脈根部に近く、不完全に終わった。その後も下血があり、手術適応と判断し10月14日開腹した。膵体部に拍動性の腫瘤が存在し、膵体尾部切除を行った。切除標本では動脈瘤の内部はコイルと血栓が詰まっていたが、血栓を除去すると膵管との交通が確認できた。本症例は脾動脈瘤が膵管を介して下血を来した極めて希な症例であった。

10) 4年間経過を追えた膵嚢胞性腫瘍の1例

大矢 洋・若井 俊文
伊賀 芳朗・村山 裕一（厚生連村上総合）
清水 春夫（病院外科）
佐藤 信昭（新潟大学第一外科）
山野 三紀（同 第一病理）

我々は、4年間の経過を追えた膵尾部嚢胞性腫瘍を経験したので報告する。症例は42歳女性。平成4年5月25日左季肋部痛を主訴に来院。エコー及びCTにて膵尾部に径4cmの嚢胞と臍石を指摘された。腫瘍マーカーはSPan-130.3 U/ml以外正常であった。平成8年より左季肋部痛が頻回になり9月5日入院。エコーにて嚢胞内に隆起性病変を認めた。CTでは嚢胞内に造影される壁に結節を認め、同部位はGd-DTPA MRIにて造影された。ERPでは主膵管は先細り像を呈した。膵液細胞診はclass I。腹腔動脈造影では腫瘍の部位に一致してavascular areaを認めた。CA19-9 186.6 U/ml、DUPAN2 5,340 U/ml、SPan-1 127.4 U/mlと上昇。